

「源氏物語」に対する生徒の反応

— 高校三年のばあい —

長谷川 孝 士

国語科における教材研究の必要条件として、その作品のもつ教育的機能の分析的考察がおこなわれなくてはならないことは周知の事実である。それも、学習者 \parallel 生徒のその作品ないし教材に対する反応調査の上に立ったものでなくてはならない。その作品の提示する話題・主題への興味・関心・理解度、さらに、その文章としての難易度などの分析が、そこでの目標とのかかわりあいにおいて正當に把握されてこそ、教材研究が教材研究たりうるのである。

今日、高校において、「源氏物語」が教材として採録されてない教科書はきわめてまれである。現行の国語科甲および国語科乙のばあいにおいても、また、明年度（三十八年度）から採用される国語科古典甲および乙においても、何らかの形で「源氏物語」が教材として採り上げられて、学習者に提供されている。

一方では、その難解さが言われつつも、一方では、その古典的価値

ないし意義の高さのゆえに、高校生には「読ませなくてはならない古典」として、その反応の程度を認識せぬままに、不用意に学習させているという傾向があるのではないか、という疑いすらある。

いったい、学習者 \parallel 生徒が「源氏物語」をどう讀みとっているか、どの程度読めるのか、そして、それを文学として、ひとりひとりがどういう受けとりかたをしているのか、ということを知ることが大きな意味があると思うのである。

私の学校では、ここ数年来、三年生の国語科乙で、ひきつづき、日本文学協会編の「源氏物語」（抄本）をテキストとして使用して学習させている。ここでは、四学級（五学級のうち）の生徒約一六〇名に、「源氏物語を半年間学習してきて」という題で、学習感想文を自由に書かせたものの一端を整理して報告することにする。四学級の学習指導の担当は私をふくめて三人の教官がこれにあたり、その扱いかた、進捗等は若干異なっている。そのうち、三学級は現

在、第一部「玉鬘」あたりを学習しており、あとの一学級は第二部の「若菜下」のあたりを「罪のわだち」という見出しのもとで学習している。「玉鬘」を現在学習している学級のうち二学級は、先ごろ教育実習のために、特別に数時間「第三部」の梗概の説明を聞き、そのごく一部分を読んでいる。

いわゆる昔物語的性格を持つ第一部以外をまだ学習していない者と、長編小説的意識の見られる第二部あるいは第三部をすでに読んでいる者とは、文学作品としての「源氏物語」についての感想もいくらかは異なるはずであろうが、ここでは、いちいちその区別をしないで、感想をとりあげていくことにしたい。

この学習感想文は、事前に予告せず、およそ十分程度の時間で、自由に書かせたものであるから、機械的な分類や統計的処理はできない。むしろ、そのほうが、「源氏物語」に対するいわゆる問題意識が率直にとらえられると思ったからである。

二

「ひじょうにむずかしい。」「意味がとれない。」と書いた者の数が全体の三分の一近くあった。

「文章の難解なことは言うに及ばず。まるで外国語を読んでいるような感じ。(男子)」

「むずかしい。源氏を読んでも、この一言につきると思いますが、今では、大体の意味くらいは一読してわかるようになってきた。(女子)」

こと。」をあげている男生徒がある。

「源氏物語はぼくらにはなじみのない古文で書かれている。しかも、聞くところによると、その中でも特に難解なものだそうである。そのためぼくは、源氏物語を読むといえば、そのページの一字一句の意味に血眼になるのあまり、その部分が全体のなかでどんな位置を占めているのかは全然わからないのである。(男子)」

さらに、なかには、「源氏物語は自分にとってはずかしい」と言いながらも、「解らなければ解らないなりに、断片的でもよいから、古典といわれる源氏物語を読むということは、大きな意義があると思う。」と述べ、「受験のことを考えない読みかたがぼくの理想とするところである。」と言う男子もある。

「部分部分の説明に迫られて、源氏物語を理解することなど不可能」「時間さえあればというのが実感」という男子。「授業中、口語訳についていくのが精いっぱいというところ。で、源氏物語は現代にもつながる名著だとかなんとか聞いてきても、実感が全然浮かばない。(男子)」「原文は少しにして、現代語訳で読んだらおもしろいと思う。」という男子もある。

総じて難解だという感想が多いのであるが、すでに半年学習してきて、四月当初とはよほど説解力もついてきたことを述べている者もかなりあった。

「勉強し始めたころは、全く書いてあることがわからなかったが、今では、大体の意味くらいは一読してわかるようになってきた。(女子)」

「四月ごろは文法的なことがあまりわかっていないせいもあって、読みにくかったが、今では、特にむずかしい単語や引用などを

のぞいたら、感じとしてわかるようになった。(男子)」

「初めは難解な文章だと思ったが、さすがに半年も経過すると、これはだれのことばか、給ふ・奉る・侍りなどの敬語なども、何となくわかるようになった。(男子)」

「源氏物語の教科書を買った時、むずかしくなるな、と思っただけで、そんなことはなかった。筋がおもしろいせいか、文法も楽しみながら学習できた。一番驚くのは物語に潜む伏線である。これだけの長編だから作者自身が人間的にも成長しながら書いたに違いないことがうかがわれる。(中略)私自身、源氏がすらすらと読めることよって、古文に自信ももてた。気分がいらいらしてどの科目にも集中出来ない時、源氏物語の教科書は一服の清涼剤になってくれる。しかし内容はまた別である。たくさんの女性の登場、そしてそれぞれの運命、いつまでたっても源氏の君に好意はもてない。

(女子)」という者もある。

「むずかしい」と言った生徒が、「むずかしくは感じない」といっている生徒よりも読解力が低いとは言えない。同様に、「むずかしくない」と感じている者が、正確に読解する力がとくにすぐれているとは必ずしも言えない。むしろ、やや目立つた傾向として、ひじょうに難解だ、字句を追っていくのが精いっぱい、内容を味わうことなどとうてい自分にはできないという意味の感想を述べた者のほりに、いわゆる評価の4段階・5段階の者が多い事実である。読解力の評価は中以下であっても、主体的に「源氏物語」を「おもしろいと思う」と感じて読んでいる者のいる事実は見のがしてはならないことのように思えるのである。

主観的に、難解と思うか思わないかは、読解力の程度を客観的に

とらえる尺度ではないとすれば、むしろ、どう読みとっているかを、別の側面からとらえてみることによって、その読解の程度を知ることができらるであらう。

三

ある女生徒は、「たいへんロマンチックな物語だと思う。(中略)源氏を勉強している時は、現代のいろいろな身近な問題、試験地獄、交通問題など忘れさせてくれる。」というほどの同化を示しているし、別の女生徒は、「次第に読み慣れるにつれて、式部の微妙な筆さばきにひかれはじめた。自分の力だけでは読み取れないような点を、教壇で学び、参考書類を読んで知るたびに、古い王朝の昔にはいっていきけるような気がして楽しかった。(中略)こういう高い精神生活をしていた平安の人々は、われわれの祖先だと思つと、日本人としてのほこりを感じる。私たちは日本人であるならば、源氏を読むべきである。そして、それを現代に生かしてこそ、子孫としての私たちの役目が果たせるのだと思ふ。」と述べている。

ある男生徒は、こう書いている。

「面白いと思う。人物の設定、構成など、現代小説に近いものを感じさせる。第一部以降の展開も、それが何か、今日の自分の周辺にあるように感じる。」小説手法における現代小説との共通性を感じとっていると見てよいのではなからうか。

「小学校時代から、源氏物語の名だけは歴史の本などから教わってきた。その時分は別に紫式部は偉大だとは思わなかったが、今は

んの少しばかり原典にじかに接して、言い知れぬ感興を味わうのである。複雑な人間配置、きめの細やかな文章の技巧、そして一貫する抒情、あたかも平安の現実によわされるようである。(中略)この世界的な大古典にとりくむべく、ばくは意欲をもやすのである。」と言う男生徒。

「あんな長編物が千年もの昔に、女性の手によって作り出されたことは本当に誇るに足ることと思う。文章も、人情の細やかさ、季節の推移など、すばらしく繊細に写し出し、読んでいても魅了されてしまふ。(中略)中古特有の運命観、はかない物の中の美の追求が強く、弱々しいが、人間としての哀感がしみじみ感ぜられる場合もある。やがてはおとずれるといふほのかな希望をもつて、静かに悲しく待っている数多くの女性たち、今の私たちにも、全く同じではないにしても、そうした心境になることがあるのではなからうか。」というふうな感興を示している女生徒。

「やはり人間は人間であるから、いつの時代でも、人間としての喜びや悲しみを持つのだなあ。」としみじみと思う女生徒、「昔の人は何においても調和ということを重んじたと思う。情景とか身分とかにふさわしくビッターしているのが美しくりっぱで趣のあることとされた」のに共鳴する女生徒もある。

「紫式部の 人間観察眼の鋭さはすばらしいものだと思」う女生徒、「人物関係が綿密に整理されており、登場ひとりひとりがおのおの違った個性を持っていることに感心しました。」という女生徒、「ひとつひとつの場面、文章を 声を立てて 読んでいくにつれて、何ともいえないうおい、時には悲痛な、時には美しい、時には残酷なほどの情のほとばしりが胸につたわってくるのを感じ、ここに古典の意義があるにちがいないと自己満足にひたるのである。」

という男生徒がある。

文の長さなどについては、そのゆえに難解なのだとする者もかなりある反面、「一文一文が非常に長いが、物語形式なので、そのほうがふさわしいのではないか。読者の感情を切れ目なく続けさせるので、情感をもりあげる効果を持つ。」と思う女生徒があつて、源氏物語のセンチメンスの長さは、作者の認識力の精緻さと執拗さの証拠であると論じたフランス文学者の評論を思い出させたりするのである。さらに文体の美しさを、このセンチメンスの長さとの関係においてとらえて、ひとりの女生徒は次のように述べている。

「源氏物語の文体の美しさは、一センチメンスが長く流れるように調子よくつづいていくところにある。これは大和ことばの特徴だとも言えるだろうが、同時代の清少納言の枕草子には源氏物語にあるようなリズムミカルな調子を感じない。このリズムミカルな調子を作っている要素に、和歌と地の文との結合がある。和歌がそれ自身として独立しているながら、地の文の中に巧みに融合されていて、われわれには一つの文として感じられる。」

大和ことば、それも平安時代の文章の特徴としてセンチメンスの長さを単純に片づけえないで、随筆としての枕草子との対比の上で、物語であるゆえのセンチメンスの 長さ と理解しようとする志向が、このばあいも見られるのである。

「登場人物の行動は、道徳観、社会的環境の違いはあるが、現在のわれわれの心のどこかに登場人物の考えかた感じかたがあるように思う。源氏物語はけっしてわれわれとかけ離れた存在ではなく、われわれの心に深くはいつてくるように思われる。(男子)」というような肯定的受容は男女とも相当示している。

部分的感想として、以下、いくつか挙げてみることにする。

「源氏物語の中でいちばん好きなどころは、と聞かれたら、はくはすく々若紫と答えるでしょう。そのものは、なんでもは、よくとってはどうでもいいのです。若紫における主人公たちの健康的なあかるさ、若い源氏にふさわしい女性紫上の知的であつてそのうえ女性性としてのやさしさ、美しさ——なにかたまらなくすばらしいもののような気がするのです。(男子)」と、若紫の巻に共感を示す者。

「夕顔」が「なにがしの院」ではかなくみまかるくだりに強い印象を受けたとする者が数人あつた。「とくに、『よびすぐるほどに……』から、惟光の朝臣が来るまでは息のつまるような感じで一息に読んだという男子、「なぜか夕顔のかれんな姿が自然に目に浮かんでくる、(女子)」、と言ひ、「その神秘的な美しさに心ひかれる。(女子)」と言つてゐる。

「物怪」は強烈な印象を与えたとみえて、数人の生徒がそれにふれてゐたが、次の感想は女子のもので、特色をもつてゐる。

「物怪というものに興味をひかれた。にくらしい人たちにたつて死に至らせるといふ平安時代人の考えかた。それはとくに女性にとつては一つの救いとして考えられたのであろう。力のない女にとつて、にくらしい人を亡くしてしまふ方法として最も都合のよいものだろう。肉体的な手段によらず精神的手段による点は全く日本のである。六条御息所が葵上に対して物怪としてたつたときに、彼女は自分で、たたるつもりはないのに、いつか物怪になつてゐるのを、香などで気がつくところは、女の嫉妬とか業の深さとかを強く感じる。また、自分で物怪となる自分をどうにもできずに苦しむ彼女に、女のあわれさを感じる。女の嫉妬、消えかきりそうになり

ながら、いつも青白く燃えつづけてゐる情、そういうものの具象化された形としての物怪に心をひかれる。」

また、政治的権力抗争の中で、この物語を讀むことに関心を示したのもある。

「源氏物語の価値は、文学的要素のみならず、日本において一つの頂点となつた藤原一族の榮華を誇る時代の社会的背景を知る手がかりとしても評価される。(中略)平安朝初期を経て、外戚にあたる藤原氏の権力がのしかかると、朝廷はもはや偶像にすぎなくなつてゐた。このような社会の移り変わりを光源氏という主人公を中心において回転させてゐる。当時の憧憬である宮中生活の奥趣が、いかに荒んだものであるかを作者は感じ、失望したのであろう。奥在を疑うほどのすべての能力をそなえた人間——光源氏でさえも、その中で権力に押さえつけられた生活をしなければならなかつた。一般庶民においては、それが幾重にもおおいかがふさつてきたであらう。それ故に、現在考えうる以上に信仰が必要であつた。(女子)」のように、仏教の意味にまで及んで考へてゐる。「権力を自由に振りまわすことのできる彼らであつても、心の苦悶、また対人関係における葛藤など、すべてが人間のもつ最も奥深い心」にひそんでゐることに思いを寄せる男子。そのほか、仏教思想への関心と、それへの理解しがたさを述べたもの、仏道にはいることによつて果たして救いがありえたのかと、むしろ否定的にみる者などが十名程度あつた。

さらに、テーマについても、女のあわれさと、女の立場からの抗議、人間の弱さの表現、単なる昔物語的な理想的男女の提示、平安貴族社会に生きる女性の人生教科書、人間の内面的苦悶と生きかた

の追求など、種々のみかたがあつて興味をさそつた。

なかに、文学としての源氏物語を、次のような独特の見かたでとらえた男生徒があつた。

「源氏物語について、自分はそれを神聖化する必要もないし、そういう、路傍の石となすものではないと思う。自分にとっては、源氏物語は、濃霧の中で出会つた縁のうすい隣人にしかすぎない。眼前に急に現われて、二、三言、ことばをまじえ、また、何事もなかつたように去つていく隣人にしか。しかしながら、隣人がよく示す、眠つた自分の感覚をよびおこすやうないつわりのない純白さを源氏物語は持つていた。といつても、それは、源氏の君ではない。入宮の大君である。大君の心の純白さは、ガラスのコップの中でじつと悩んでゐる蝶のイメージをおこすのである。」

四

登場する人物たちの生き方については、批判的・否定的な見かたが多いのは当然のことであるが、とりわけ、主人公光源氏への批判は手きびしい。これを肯定的に見るものはほとんどないといつてよい状態である。ことに、女生徒たちの批判は痛烈で、いかに時代の違いがあるとはいえ、許せないというのである。

「夢物語のような感じを持ちながら、源氏物語を読んできました。小説なのだからと、一応譲つて考えても、納得がゆかない。光源氏の行動、生活様式、人間関係などについてもあんなことが許されてよいものか、とも思う。(女子)」

「まず光源氏についての私の感想を書いてみる。一言に言つて、

私たちには想像できないような生活をしている。一見はなやかな人生に見えるが、その裏には、腹立たしくなるような墮落、下劣と叫びたものを感じる。時代の相違はあるにしても、光源氏という人物に私は非難の目を向けた。(女子)」

光源氏へのこうした非難にかやうものとして、その時代の女性のあわれきを感じて、「そのような悲しみに対するせいじっぽい抵抗が、源氏物語に出てくる女性たちによつて、それぞれちがつた立場から私たちに語りかけられているのです。源氏物語は人間を描いているところに、古典と言われるゆえんがあると思います。」と述べる女生徒もあつた。

「あんな男たちに一国の政治ができたのであろうか。本職の政治の方はどうなつていたのであろうか。そんな面もこの物語にもっと織りこまれていたら、物語はおもしろくなつていたように思われる。男女関係のなりゆき自体が人生となつていてことを考えると、一つ一つの話が大げさな感じがする。共感も覚えられないし、興味もない。(男子)」

「人間としての、なにかが欠けている人物が多すぎる。(男子)」

などのような批判である。ここで、女性による女性のための物語であるゆえに、男性としての公的な生活の描写がないことはむしろ当然であつたとする見かたの感想が見当たらなかつたことはつけ加えおいてよいだろう。

「目をとじて、光源氏や紫上の姿を思い浮かべようとすると、きらびやかな衣装、美しい黒髪などは容易に浮かんでくるのに、顔はどうしても浮かんでこない。(女子)」

「絵巻物としてしか源氏はいない。(女子)」とみる者等、そのレアリティの薄弱さを指摘する者が若干あつた。そして、「やはり女性の描写のほうが、作者

が女のせいとか、すぐれているようだ。(男子)、「女性たちは比較的よく描かれているが、男性、とくに光は、さまざまな女性を登場させるためにひき出されただけのものではないか。(男子)」と

みて、光を理想視することへの反発を覚えたとする者があつた。主としてモラルの面から、女性瀧をやる光源氏の生き方を批判

・否定する者、その描写の不足を指摘する者が多いなかで、つぎつぎと女性を愛する光源氏をとおして、「男性というものはもともとああいった本能を持っているのだと私は思っている。」として、その意味で現代に通ずると思う女生徒がひとりあつた。また、「源氏のそういう行動を許せない」とみるモラルな見解と、半分理解できる気持との板ばさみで、何とも言えない。」という男生徒がひとりあつた。

こうしたとらえかたに通ずるものとして、「今の世から考えて、源氏という人にすぐく腹が立ってきます。(中略)絶対に許せません。」と言いつつも、一方では、「もし今源氏のような人がこの世に現われたら、女性という女性はいずれその人をしたうようになる。そんな気もします。」という見かたをした女生徒もひとりあつた。

次に、登場する女性たちに対しては、その主体性のなさ、自我のなさを、いかに時代の差とはいへ、くやしがり、腹立たしく思い、あわれだと同情する者がほとんど全部と言つてよいだろう。「人間性を無視されたような、しいたげられた女性の姿には、同情を感じないでもないが、彼女たちの無力、あきらめ、醜い嫉妬には、それ以上の激しい憤りを感じずにはいられない。(女子)」というたぐいである。だからこそ、それへの憤り、抗議のテーマを持つ作品だとみる者もわずかながら見られた。

五

こうした「源氏物語」を高等学校で学習する意義について、学習者がどのような意見を持っているかを見てみよう。

積極的にその意義を否定する者が十名ばかりあつた。

「りっぱな古典、古典はその洗練された文章と秘めたる年月のうちにつつかわれた靈的なエネルギーでもって、ドライな(少なくとも表面的には)近代人の胸をもうつ。そういう宣伝文をブラさげて、押しつけられたこの物語。何ともたたくつな、というよりひどい反発を感じる。メソメソした、女々しい、なま白い、無気力な人間が目にかんできてしまつて不愉快ごく。ヘドでも吐きそうな気がしてならない。(中略)ぼくは源氏物語のような文面にふれたくない。自分までよこれてゆくような気がしてならないからだ。(男子)」というような態度で、まっこうから学習教材としての意義を否定する者、「単なる男女の恋愛を描いた長編三文小説を読まされる(男子)」無意味さを訴える者があつた。そして、「すぐれた古典」として先人におしつけられるのではなく、「古人の讚美的批評に頼らないで、自分の心で接すべきである(男子)」ことを主張するものなどがあつて、わずかな人数ではあつても、こうした受けとめかたをさせていることは、私たち指導者の扱いかたそのものへの反省をふくめて、やはり問題とすべきかと思う。

そのほか、古典文学としての価値やそのよさはわからないが、また、内容には反発は覚えるが、大学入学試験のため、古文読解力の養成のため、学習することの意味がある。「今の自分は受験のため

に勉強しているだけである。(男子)「という考えかたの者が五名あった。そして、大学入試勉強のためには、源氏物語を学習することはいいとしても、年間とおして、源氏物語だけでなく、他の種々の古典を少しずつ多種にわたって学習すべきであるとする者がひとりであった。

なかには、「国語乙の時間というのは、正確に解釈して、正しい文法力をつけること。だから、国語乙の時間で、源氏がおもしろくなるということはない。」と、最初からわり切つて、鑑賞面を求めようとしないうで、この物語を学習する意義を認める男生徒もある。単なる口語訳、表面的な通釈ではあきたらず、「鑑賞のために、時間をかけて、みんなでじっくり話し合つたりするのが理想だが」「高校程度の文語読解力からして、内容的理解が精いっぱい、文学として鑑賞するのは至難ではないだろうか。そのうえ、全部読むのではなく、いわばダイジェストをつつのであるから、効果半減。高校で扱うのは再考さるべきだと思ふ。(男子)」という者もある。

しかし、大部分の者は肯定的で、「もし教室で源氏をやらなかったら、たいてい一生において読むことはないだろうから、一部分だけでも読んで(女子)」いくことは有意義であるとする者が圧倒的に多い。「私は源氏を習うまで少しも古典に興味がなかったが、源氏を読みだして、少々興味を持ちはじめた。その読みかたが試験用の読みかたであっても、くりかえし読むうちに、しらずしらず魅せられてくる。できれば、一年生のときから、落ちついて読んだらよいと思ふ。(男子)」

「これによつて興味を覚えた人は、あと、自分で、原文でも現代文の訳でも読みとおせばよいわけだ。(女子)」とする者も多

い意見であった。

「今まで学習教材として教科書の中にあつたそれが、外国のいろいろな古典文学にまぎつて、日本の一古典としてばかりの目につつてきたことに、新しい発見であつた。たとえばトルストイのクアンナカレニーニナクダとか、スタンダールのク赤と黒くだとかと同じように、繁式部の源氏物語を考えるようになったのはどうしたことだろう。(男子)」と述べる者もあり、「源氏物語は、きらびやかにくりひろげられる人間絵巻である。愛欲・憎・悩の人間くさいものが、どろどろの一つのかたまりとなつて、そのさまざまな起伏を構成している。それを読むとき、時代のへだたりに関係なく、人間の弱さを感じる。(中略)愛というものの一つの疑問をもつ十七、八才ごろ、教材として扱うのは、すぐいい勉強になる。そこに登場する愛が単なるプラトニックなものでないからいいそうのこと。人間くさい、現実的な愛であるからいいそうのこと。男性中心の愛であるからいいそうのこと。」と主張する女生徒もあつた。

「日本文学の大きな山をなしている平安期の古典文学を読むだけでも意義はあるし、まして、唐風のものから脱却して純粹に近い国風文化が小説の世界においてあらわれたこと、しかも、世界最古のすぐれた長編小説であること……。」と書けばわれわれ大和民族たる者は読まずにはおれないはずである。もちろん時代の推移とともに表現方法も変わったし、物の考え方も変わったから、源氏物語を現在の尺度のみで考えることは危険であるが、底を流れる人間の真情はそう変わるものでもないから、われわれは源氏物語を読むにあつては表面的な語句ばかりを追わずに内面的なものを追求する必要があるのではないか。」として鑑賞の深まりを要求し、そう

することによって「幅広い人間形成の大きな助けとなることはまちがいのないことである。」と言いつける男生徒もある。こうした感想はかなり多く、「私たちは一年の時からいろいろな古文を読んできた。その大半は、文意を解釈し文法を覚え文構造を見てそれで終わりであったような気がする。それがこの源氏物語を読みだして、単に文意をとるだけでなく、それから出てくる王朝の人の生活、考え、おこないを直接に読みとるべきだと感じた。」「(男子)」として、解釈・鑑賞の深化を求める気持ちも述べている。

そして、三年になってからはおそすぎるから、一年生、二年生のときから、少しずつでも、また比較的やさしいところからでも、学習するのがよいと言う者が三名あった。

いずれにしても、年間をとおして源氏物語を扱うことによって、以上のような感想は出てきたものと思う。内容について否定的な見かたをする者がいくらかあるにしても、総じて言えば、高校入学以来、かなりの古典に接してきて、それらに比して、この作品に興味と関心とをより多く示していることが認められるだけに、高校三年生で源氏物語を扱うことは十分積極的な意味を持っていると言えるのではないかと思うのである。

(昭和三十七年十一月十一日、広島大学国語国文学会秋季集会、
「国語教育研究協議会」における発表原稿に若干補筆)

(広島大学付属高等学校教諭)